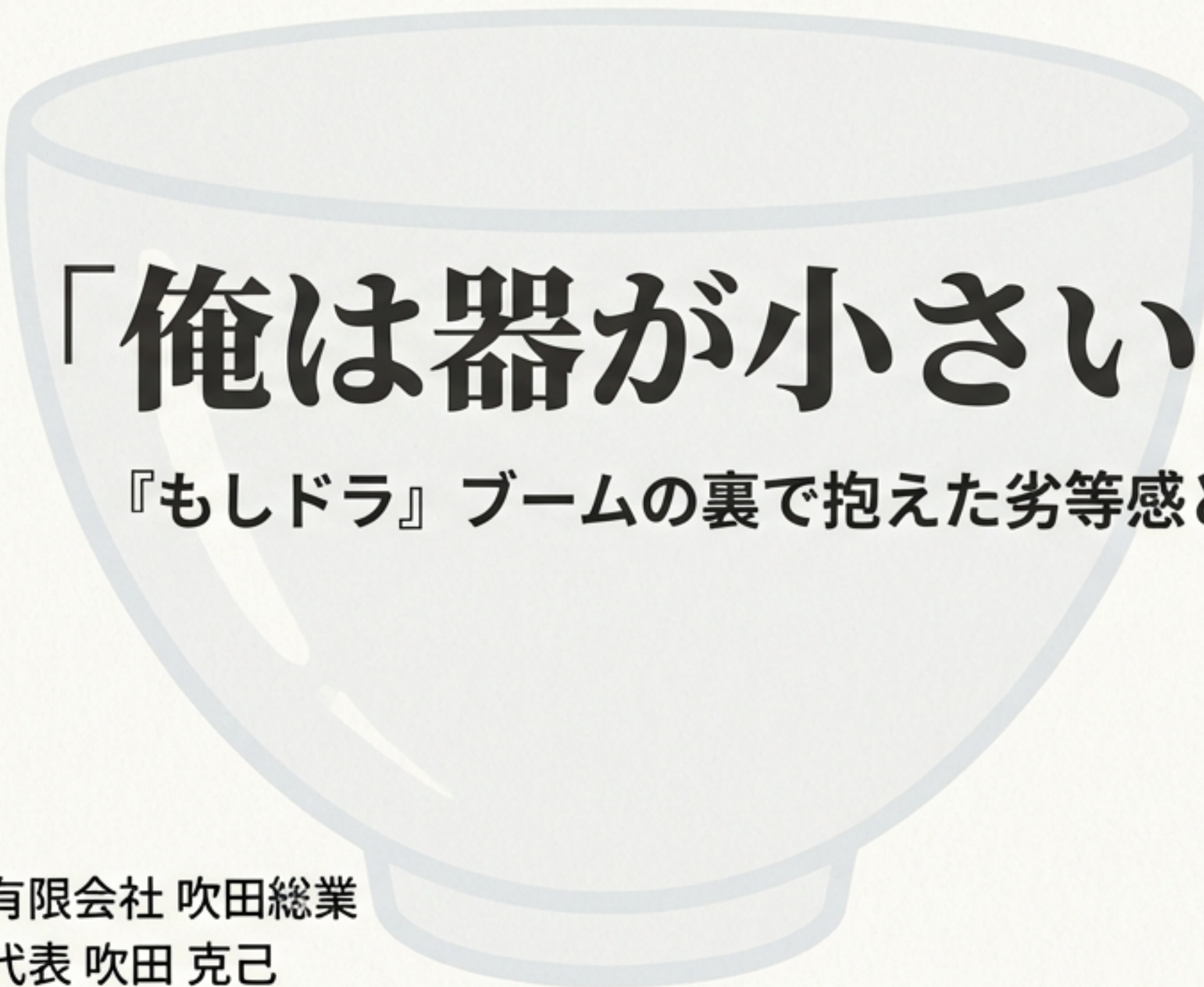




「俺は器が小さい社長なのか？」

『もしドラ』ブームの裏で抱えた劣等感と、たどり着いた「選択」の真実

有限会社 吹田総業
代表 吹田 克己

2010年代、経営の世界を席卷した一つの「正解」

2010年代前半、世の中は『もしドラ』ブームの真っ只中にありました。

ピーター・ドラッカーの理論をベースにした「従業員に寄り添い、モチベーションを引き出す」というマネジメント論が、唯一の「正解」として称賛されていました。



しかし、私の本能は「NO」と叫んでいた

流行のマネジメント論とは裏腹に、私の中には拭えない本音がありました。

- 「やる気は自分で出すものだ」
- 「会社が従業員の機嫌を取る必要はない」

世間の「正解」と自分の「本能」との間で、私は強烈な葛藤を抱えていました。



私は、経営者として 「器が小さい」のだろうか？

従業員に寄り添えない自分は、経営者として失格なのではないか。
共感を軸にできない自分は、冷酷で、器の小さい人間なのではないか。

日を追うごとに、劣等感だけが膨らんでいきました。



私の本当の失敗。それはドラッカーを实践できなかったことではなかった。

今振り返ると、私の本当の罪は2つありました。

1.

自分のタイプを無視したこと

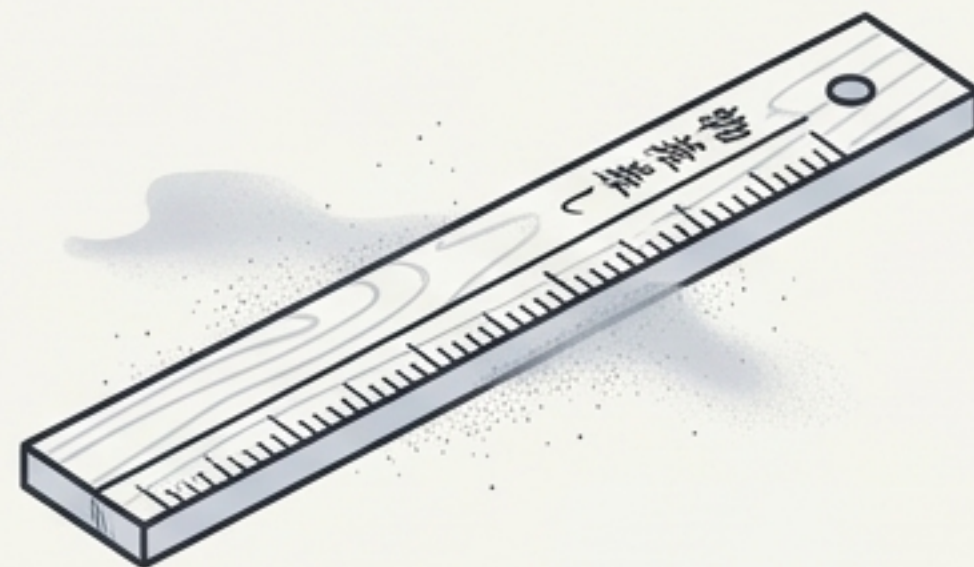
世間の流行りに流され、自分ではない「理想の社長像」を演じようと迷走したこと。



2.

自分の「物差し」を信じなかったこと

自分なりの判断基準を持っていたにも関わらず、自信がなく、それを公表せずにコソコソと運用していたこと。

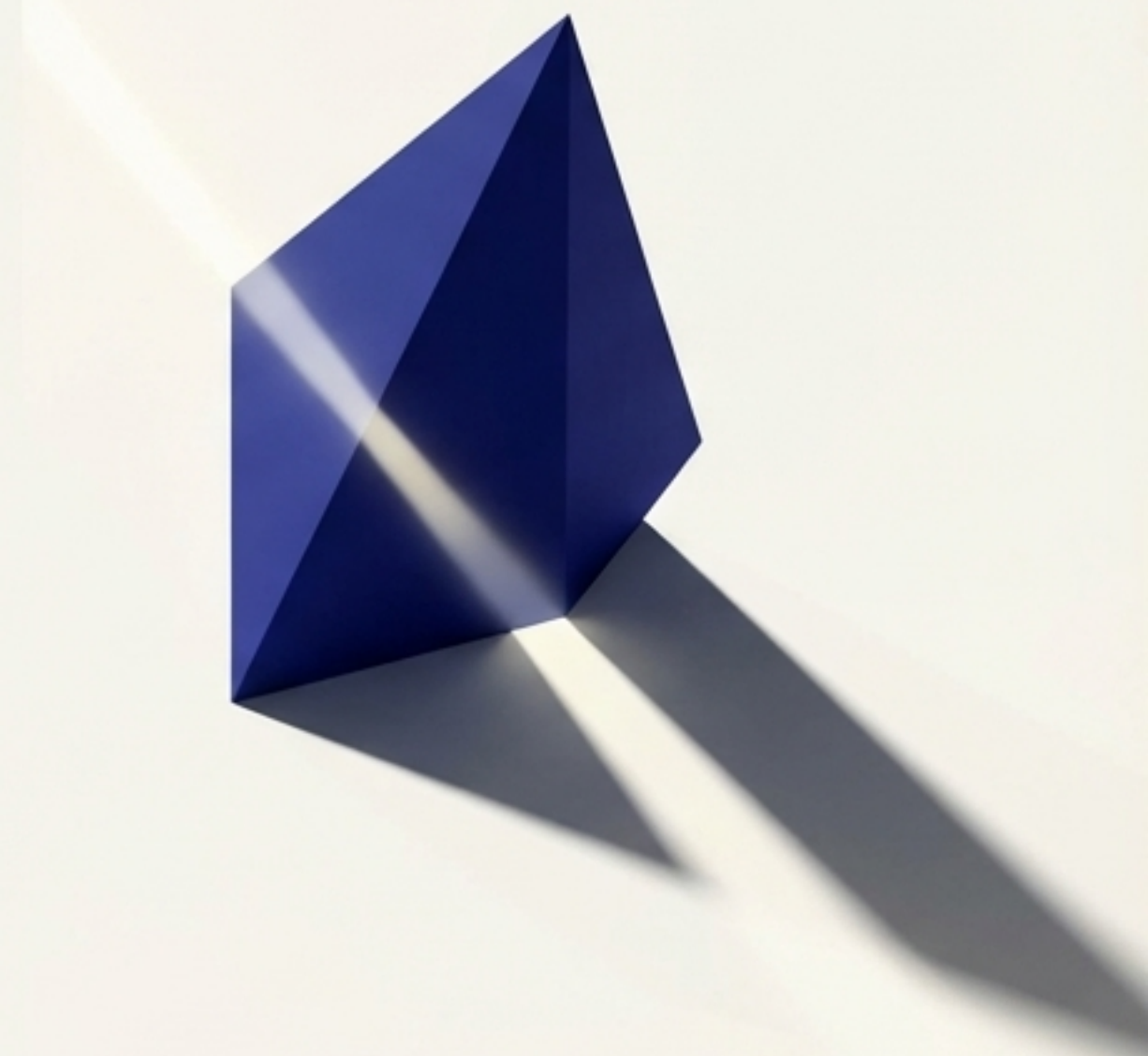


そんな私を救った、一つの理論との出会い

葛藤の最中、私は「識学」という経営理論に出会いました。
その教えは、私の本能と一致するものでした。

- モチベーション管理は不要。
- 評価は上司が決める。

それは、当時の風潮とは真逆の、しかし私にとっては非常に明快なロジックでした。



「俺は間違っ
て
いいかった！」

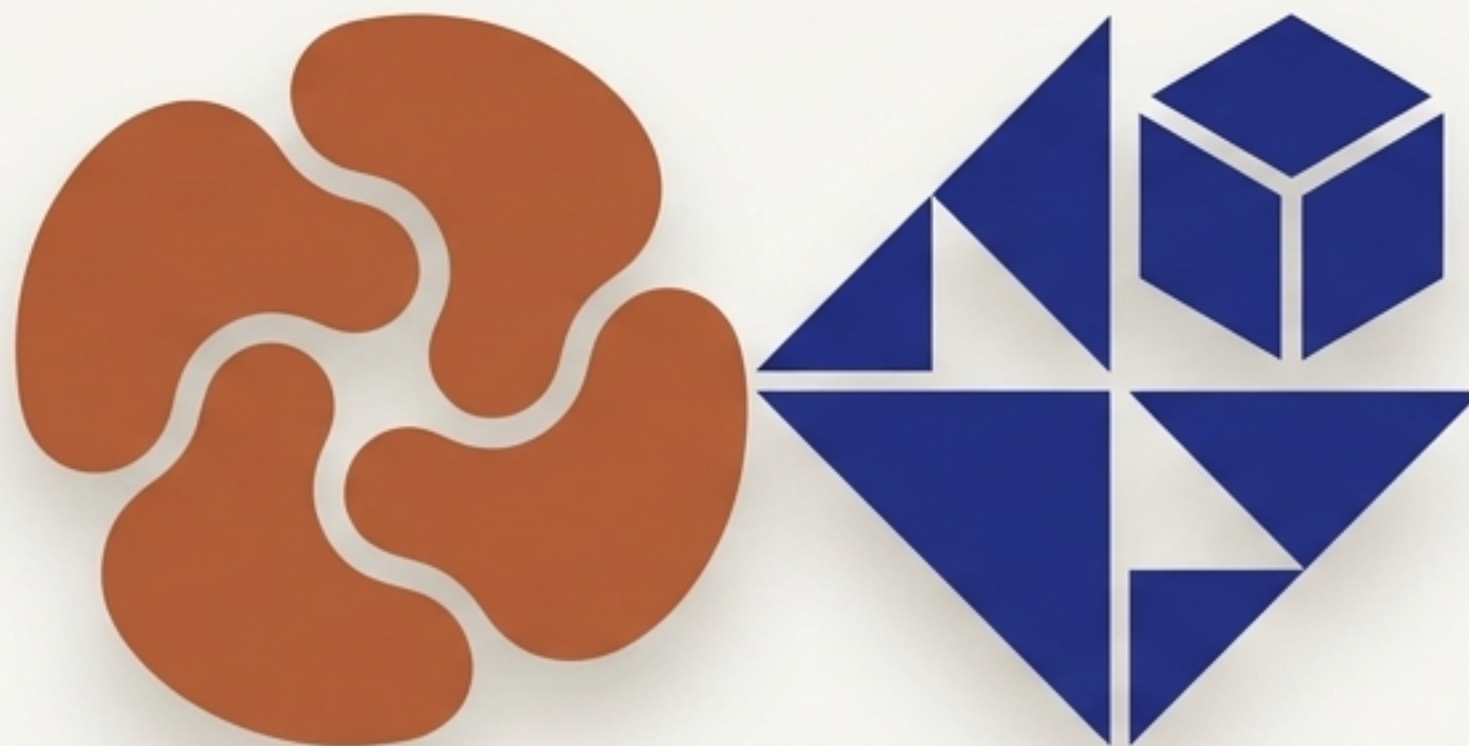
識学の理論に触れた瞬間、涙が出るほど救われたのを、今でも覚えています。

だが、ドラッカーが間違っているわけではない

ここで誤解してほしくないのは、「ドラッカーは間違いで、識学が正しい」と主張したいわけではない、ということです。

ピーター・ドラッカーは偉大な学者であり、彼の理論で成功している会社は無数に存在します。

本質は、二項対立ではありません。



経営における本当の問い

「どっちが正しいか」ではない。

「どっちを選ぶか」。

そして、その選択ができるのは、社長しかいない。

100人の社長がいれば、100通りの正解がある



ドラッカー流が合う社長

- 人間の感情を重視し、家族のように接するのが得意。
- 共感とモチベーションで組織を動かす。



識学・AIが合う社長 (私のようなタイプ)

- 感情に流されやすく、情に弱い。
- だからこそ、ルールやシステムで明確な線引きをする必要がある。

あなたは、どちらのタイプですか？

そして、これが私の「選択」と「覚悟」だ

**「私は器が小さい
のかもしれない。
だからこそ、
AIという『硬い器』
を使うんだ」**



経営手法は「道具」である

ドライバーが悪くて、ハンマーが良い、ということはありません。
重要なのは、2つの問いです。



1. 自分は何を創りたいのか？

2. 自分に合う道具は何か？

その答えを決めるのは、社長であるあなた自身です。

私が選んだ道具

数ある選択肢の中から、私、吹田克己は、自分と会社の未来のために2つの道具を選びました。



識学 (Shikigaku) :
組織のルールと構造を定義する



AI (Artificial Intelligence) :
客観的なデータと評価を提供する

より深い思考の記録

この話の続きや、ここでは語りきれなかった経営ノウハウは、以下の場所で公開しています。
あなたの「選択」のヒントが、ここにあるかもしれません。



有限会社 吹田総業
オフィシャルHP

QR Code

<https://fukita-s.co.jp>



Note 「社長の着想日誌」

QR Code

<https://note.com/fukitakatsumi>



YouTube Channel

QR Code

チャンネル登録と高評価を
お願いします。
<https://youtube.com/@fukita-s>

合言葉は
「データはAI、決断は社長。」

有限会社 吹田総業